「ふね遺産」（推薦様式）：A4 一枚に収め、それ以上は別途資料添付して下さい。

No.(*)	内容	備考
1. 対象物・資料の名称・所属または所有者	対象物： 移動図書館船「ひまわり」号 所有者：尾道市	
2. 対象物の作成・存在時期	昭和 36 年 12 月 8 日進水式（広島県） 昭和 37 年 4 月 9 日～昭和 56 年 7 月 31 日の 20 年間巡航 江田島造船所で造船 現存（尾道市瀬戸田町 B&G 海洋センター）	
3. 現状（写真添付）	尾道市瀬戸田町 B&G 海洋センターで屋外展示されている（屋根つき）。 	
4. ふね遺産認定基準の該当項目(**)	【認定対象】 （１）人や物資を輸送する船舶のみならず、作業船、艦艇、実験船、調査船、海洋構造物などを含む浮体構造物全般 【認定基準】 （１２）	
5. 歴史的・工学技術的意義	瀬戸内海の離島を巡回した広島県立図書館の移動図書館船である。ひまわり号は，文化を運ぶ船「文化船ひまわり」の名称で，人々に親しまれた。全長 14mの木造船で、宇品港（広島市）を拠点に西は阿多田島（大竹市）、東は走島（福山市）までの間にある生口島や百島（尾道市）などの 19 の島々に２か月に一度寄港した。 広島県では「平和を愛する人になるには、まず何よりも文化に親しまなければならない」という理念のもと、当時の県の人口の１割（約２０万人）が住む島嶼部にも文化を届けるため、ひまわり号を建造した。これは戦争と原爆といった悲痛な体験を通して、二度と戦争は起きてほしくないと願った当時の広島県の人々の思いから生まれた、世界的にも珍しく日本では唯一の図書館船（木造船）であり、日本の図書館史上を語る上でも貴重な平和・文化遺産である。 船の中には、本棚などが並び、約 1500 冊の書籍や映像フィルムを運んでいた。約 45 万人が利用し、約 70 万冊の本の貸出があった。航行距離は約９万キロ、地球２周半の距離である。 昭和 58 年に旧瀬戸田町（現　尾道市瀬戸田町）が譲り受け、現地に屋外展示している。 移動図書館船は、全国でも唯一の存在であり、島々の人々にとっても重要な文化をつなぐ船であった。	

6. 参考資料・文献（本表に収まらない場合は別途添付する）	『航跡：文化船ひまわり引退記念誌』[広島県立図書館/編]，広島県立図書館，1982 『「ひまわり」関係雑誌記事集』　事業課／編 『広島県立図書館五十年史』広島県立図書館／編，広島県立図書館，2002 「地方創生から見た生涯学習施策 - 図書館サービス事例を参考に」『教育制度学会第 27 回大会課題別セッションⅣ』泉山靖人 2019 「文化船ひまわり」って知っていますか？」『広島県立図書館友の会ニュース』53 植田佳宏 『せとうち暮らし Vol.20』2016 『ちゃぐりん　2018 年 5 月号』 『せとうちスタイル Vol.3』2017 『文化船ひまわり』2019　文化船ひまわり B.B プロジェクト	

(*)　No.は学会で記載します。

(**) ふね遺産認定基準の【認定対象】と【認定基準】の項目の内、該当する最もふさわしい項目一つを、文頭の番号で記載して下さい。

島から島へ本などの文化を届けた

文化船　ひまわり」本はチケット」って知っていますか？と思えるサービスを！

広島県立図書館　副館長　植田佳宏

一　はじめに

県立図書館の資料を遠く離れた場所に住んでいても「読みたい本」が届くサービスがあります。現在の「インターネット予約貸出しサービス」です。インターネットのない時代には，陸地部は，県立図書館から移動図書館車「みのり号」が巡回していました。でも，県内には多くの島嶼部があります。そこに住む人たちに本などの文化を届けていたのが，日本で唯一の「文化船ひまわり」です。

二　文化船ひまわり」の航跡

文化船「ひまわり」は，昭和37年4月から昭和56年7月までの約20年間，東は走島，西は阿多田島までの19の島嶼部を約62,000km（地球を約一周半）巡航して，約45万人に70万冊の本を貸出しました。全国でも唯一の移動図書館専用船として島嶼部の人々に図書を提供するとともに，読書サークルの育成等を通じて生活文化の向上に寄与してきました。引退後は，旧瀬戸田町に寄贈され，昭和58年4月から瀬戸田町（現尾道市）林にあるB&G海洋センターに保存されています。

三　忘れ去られた　文化船ひまわり」

その後，歳月が流れ船体の老朽化が進んでいきました。尾道の地元紙「山陽日日新聞」（平成24年1月1日付け）には「長い年月の中で人々から忘れ去られ，ひどく傷んだ姿からは寂しさだけが漂っている」という記事が掲載されるなど保存が困難な状況となってきました。平成27年3月21日付けの「山陽日日新聞」によると，管理している尾道市教育委員会では，敷地の有効利用と安全面から解体撤去を決め，平成27年2月中旬には解体工事の入札を行い，業者も選定していました。

四　地域の人たちの協力で

その話を聞いた地元に住む医師の永井晃さんが，大々の記憶から忘れられ，その歴史を知らないうちに壊され消えてしまうのはもったいない。自分達できれいにしてペンキを塗り直したい」と申し入れ，尾道市教育委員会が解体計画を一時中止しました。

永井さんは，2月末から地元の友人らに声をかけて週末に集まって作業をボランティアで始めました。まずは，塗装を剥がす作業から始めましたが，意外と大変でした。でも，地元の瀬戸田中学校の生徒さんや校長先生がペンキ塗りを手伝いに来てくれるなど，活動が広がっていきました。」と3月下旬に現地を訪れた際に語ってくれました。

地元中学生のボランティア活動

尾道市の児童文学作家の林原玉枝さんや元広島市長の秋葉忠利さん，学校で本の読み聞かせを行っているグループの見学などもあり，保存活動の輪が広がっていることを実感しました。永井さんは「ういう船が，かって瀬戸内海を走っていたという島の文化・歴史を子供達に伝えたかった。」と作業に参加した中学生の姿を見ながら笑顔で話してくれました。

五　生まれ変わった　文化船ひまわり」

地域の活動により文化船「ひまわり」は新たに塗り替えられ，生まれ変わりました。「つかまた海へ」の思いを込めて，以前はオレンジと白のツートンカラーだった船底は青色に塗り替えられました。この活動により尾道市教育委員会は解体・撤去の方針を撤回しました。

現在の「文化船ひまわり」

六　文化船ひまわりまつり」の開催

平成28年4月17日には，保存場所のB&G海洋センターで「文化船ひまわりまつり」が開催されました。このイベントは永井さんや林原さんたちが実行委員となって「文化船ひまわり」を再塗装したことで満足するのではなく，この船の歴史を語り継ぐ目的で企画されました。当日は，船内での絵本の読み聞かせや，子供たちが思い思いの絵を描きフラッグにして船に飾り付けるコーナーもあり「文化船ひまわり」を描いたフラッグが風に揺れていました。

会場内では地元の「ひまなみジュニアオーケストラ」の子供たちが「文化船ひまわり」到着を知らせるBGMとして流していたドナウ川のさざなみ」をバイオリン演奏し，当時の雰囲気を再現してくれました。当日は多くの参加者で賑わい，テレビ局や新聞社の取材もあるなど関心の高さを感じることができました。

また，この催しのニュースを知った元船長の御家族から最後の運航当時の「航海日誌」の寄贈が6月に当館にありました。

七　雑誌での　文化船ひまわり」特集

7月に香川県高松市の出版社から雑誌「せとうち暮らし」20号は「瀬戸内と本」をテーマとするので「文化船ひまわり」を取り上げたいと電話がありました。8月に打ち合わせを行い，9月の県立図書館であった取材では，船に乗っていた旧職員2名から運航当時の話を聞くことが出来ました。瀬戸田町での取材もあり，盛りだくさんの内容となっています。この雑誌は本好きの方には知られた雑誌のようで，12月の発売と同時にフェイスブックや「毎日新聞」でも紹介されるなど話題となっています。

表紙には「文化船ひまわり」も

瀬戸内と本をイメージした表紙には「本はチケット」。ページをめくると，そこは瀬戸内」と書かれており，すぐにでも本を手に港に走り出したい衝動に駆られる一冊です。県立図書館で閲覧・貸出しができる資料ですので，ぜひ御一読下さい。

八　おわりに

今年度から，館内で県立図書館の資料や情報をより有効活用していただける「電子図書館サービス」の検討を始めました。インターネット環境を活用して，これからも県内のどこに住んでいても「本はチケット」になるサービスをもっと行っていきたいと思います。